

# 1話で終わる ゼロ魔× ハガレン

tubuyaki

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルイズは、心より求め、訴える。その先に、何が待ち受けるのかも知らずに……

目

次

1  
話  
で  
終  
わ  
る

ゼ  
ロ  
魔  
×  
ハ  
ガ  
レ  
ン



# 1話で終わる ゼロ魔×ハガレン

「お願ひです、ミスター・コルベール！　もう一度、もう一度だけ、私に召喚の機会を下さい！」

彼女の必死な表情を見た私は、ついその一度を許してしまった。

「次の授業も押しています。本当にあともう一度だけですよ」

それが、あんな悲劇を生むとも知らずに……

――――――――――

「うおおっ！　なんだコレ！」

赤い外套を身にまとつた、控えめな身長の少年が、突如大声を上げた。道行く人々はその声に振り向くと、少年の目の前で光っている『何か』に目を奪われた。彼らは思つた。あれは、鍊金術が発動するときの光だ！　しかもどうやら術者は、最近名を馳せている『鋼の』じやないか。一体、何を鍊金しようとしてるんだ？　期待のこもつた視線が次々に、鋼の鍊金術師ことエドワード・エルリックに向けられた。なお半分以上の

人々は、落ち着きなく騒ぐ背丈の不自由な子供の隣に立つた鎧姿の人物を『鋼の』だと思つて、胸を躍らせていた。しかしエドワード本人であれ、鎧姿の彼の弟アルフォンスであれ、彼ら鋼の兄弟は終始おたおたと慌て、挙動不審だった。やがて、何時まで待つても光るばかりで、何事も起きないことに飽きた人々は、一人また一人と去つていった。「なんだ、失敗かい？　何時までたつても鍊金されないじやないか」

「大げさに光つてるから何かと思えば……　見てた時間返せ！」

「はっ！　こんな人目につくところで、失敗してやんの」

「だ、誰が失敗があつ！　つていうか、別にオレが何かしたわけじやねえぞ！」

コレがいきなり、オレの目の前に現れただけだ！」

エドワードの周りに残つていた数少ない見物人たちは、皆一様に白い目を向いた。  
こんな奇妙な光を発する技を、鍊金術師以外の誰が扱うと言うのか？

「……ふーん」

「そんなこと、誰が信じるつてんだ？　目の前に鍊金術師様がいるつてのによ！」

「自分の失敗を認められないとか……心の器まで小さ　「誰がマイクロ豆つぶミニマムビチビだあつッ!!」

「「言つてねえぞ、そこまで!!」」

例え小柄であると言えども、弱虫や臆病とは無縁のどう猛さで荒れ狂う、チワワのよ

うな少年を前に、見物人たちはわっと逃げ出した。

「兄さん！　何やつてるんだよ！」

驚き呆れる弟のアルフォンスへ、エドワードは何が悪いのかと言わんばかりに言い返した。

「いいかアルフォンス、こういうのはな。初めにナメられたらオシマイなんだよ。」

「なに言つてるのさ！　それでオシマイになつてるのは、兄さんへの第一印象じやないか！」

「うぐっ！　そ、そんなこと、今はどうでもいいっ！　それより問題はコレだ、コレ！」  
露骨に会話を逸らされたことにアルフォンスはむつとしながらも、兄の前に突如現れた光る鏡のようなものへと、改めて視線を向けた。

「ホント、何なんだろう？　鍊金術でも、こんなのが見たことないよ。

兄さんは何だと思う？　つて兄さん!!」

「ん？　何だ？」

エドワードは、どこかから拾つてきた小枝を手に、光る鏡をつんづん突いていた。

「何やつてるんだよ兄さん！　もしこれが危ないものだつたらどうするんだよ！」

「アルは心配性だなあ！　だけどこんなもの、じつと見ててもしようがないだろ？」

「そんなこと言つて、もし触れた途端に爆発でもしてたら、どうするつもりだつたのさ

！」

「ば、ばくはつう？」

エドワードは一瞬、顔を青ざめさせてから、言い返した。

「だ、大丈夫だ！ 俺の勘はダイジヨーブだと言つてた！」

「またバカなことを！ 兄さんは何時もそうやつて、ムチャなことばかりするんだから！」

「う、うるせえっ！ 弟からの小言なんか、聞きたくねえ！」

第一、・何も起きてないんだからいいじゃねえか。ホレホレホレ！」

「あああああ！ 何やつてるんだよ！」

エドワードは大人げなく、先ほどまではつんつん突いていた枝を、バサバサと光る鏡に突っ込んで搔き回し始めた。

「うおっ！ これオモシレーゾ、アル！ こっちから差した枝が、反対側から飛び出してこねえ！」

「うわっ、本當だ！ 枝が鏡の反対側からは消えてなくなつてる！」

でも枝は引き抜けば元のままだ。それつていうことは、つまりこの光る鏡はどこか別の空間に繋がつている……？」

「うつは―――！ オモシレー―――！ ……あつ！」

エドワードがその身長の年頃の少年にはお似合いな遊びに夢中になつてゐる最中、彼の鋼の指先が、僅かに光る鏡へと触れた。指先は接着剤でも塗り付けたかのように、鏡から離れなくなつた。やがて鏡面は波打つようになつて、彼の手はずぶり、ずぶりと、鏡の中へ引き込まれ始めた。

「うおおおおお！　ヤベーぞコレ！」

「兄さんっ！」

エドワードは必死に腕を引っ張つたが、鏡が彼の手を引き込む力は強く、みるみると彼の手首の先が、そして肘より先が、鏡面に沈んでいった。そしてついには、彼の肩より先に至るまでが、光る鏡に吸い込まれ始めた。

「ウギギギギギ！　くそぅ！　このまま飲み込まれてたまるか！」

ウインリイの作つてくれた、俺の大事な右腕を返せ！」

だが無情にも、鏡は相も変わらず、彼の右腕全てを飲み込もうとしている。

「兄さん！　もう、これ以上は駄目だよっ！」

このままじゃ、腕どころか兄さんの体まで持つてかかる！」

アルフォンスの言う通り、エドワードの胴体はもう、鏡に触れるか触れないかというところまで近付いて來ていた。今でこそ、彼は全身の力を使つて必死に耐えているが、きつとすぐにでも限界は訪れるだろう。

「ツツツ……！ 畜生！ こうするしかねえのかよ！」

エドワードは悔恨の念にかられながらも、叫んだ。

「アル！ 頼む！」

「分かったよ、兄さん！」

アルフォンス・エルリックは、鎧となつた身体の両手をパンと叩き合わせると、僅かに飲み込まれずに済んでいるエドワードの肩口に、そつと手を置いた。刹那、エドワードの機械の右腕は、その腕が精密な動きを成すために必要な細々とした部品の一つ一つ、小さなプレートやワイヤー、ばねに至るまで分解され、更にはそれを超えて砂鉄にまで細くなり、果ては元素にまで分かたれ、元の形を失つた。分解された彼のオートメイルは、そのことごとくが光る鏡に吸い込まれ、後にはねじの一本すら残りはしなかつた。光る鏡は、いつの間にかその姿を消していた。

「くううっ！」

「兄さん！ しつかり!!」

オートメイルを失つたエドワードが、その激痛に呻く。長いリハビリを得て機械の腕に適合した彼の腕から、血がぽたぽたと流れ落ちた。

「こんな痛み、あの時に比べりやどうつてことねえ！ それよりも……！」

エドワードは青ざめた顔をギリッと歪め、天を仰いだ。

「ウインリーに殺されるつ――――!!」

普段のルイズならば決して口にしない、はしたない言葉が、まるで臓腑から湧いて出たかのような苦しい呻き声と共に紡がれた。

「ちくしょう……！　持つて行かれた……！」

たくさんの汗と涙を顔に浮かべ、地に伏し声をわななかせる少女を前にして、コルベールは深い悔恨の念を抱かずにはおれなかつた。予想は、出来たはずだつた。いくら目の前の少女が努力家だと言つても、彼女が魔法を成功させるところなど、見たことがない。そしてそういう時は、必ず爆発が起きることを、彼は知つていた。ならば、もしその爆発が手元で起こつてしまえばどうなるか？　今まで起こらなかつたから、なんてことは言い訳にならない。現にそれは今、起きてしまつた。少女が魔法を唱え終えたその時、杖を持つていたはずの彼女の右腕は、どうしようもない爆発と共に失われていた。肩口から零れ落ちる血が、草原に生えている青々とした草を毒々しい赤に染め上げていく。その凄惨な光景を前にしては、直前まで彼女を小ばかにしていた生徒たちも、押しなべて口を紡ぐことしか出来なかつた。

「なんで……！ なんで私だけ……！」

「ルイズ！ 気をしつかり持つのよつ！」

普段、魔法を失敗してばかりいる彼女とは仲が悪いはずのミス・ツエルプストーが、顔色を変えて彼女の元に駆け寄り、声を掛けている。コルベールは、ルイズの根元から失われた腕を見て思つた。これは駄目だ。治癒魔法のヒーリングでは、とても血を止められない。傷口を焼くしかないのか？ だが、既にこんなにも傷付いている彼女へ、更なる痛みを強いるというのか？ 彼は急いで考えを巡らすと、すぐにある生徒の存在に思い至つた。

「ミス・タバサ、協力をお願ひします！ 彼女の傷口だけを、凍らせることは出来ますか？」

キュルケの後を追つて来ていたタバサは、コルベールに声を掛けられ、こくんと頷いた。

「離れて」

タバサは、ルイズの傍にいたキュルケに退いて貰うと、水と風の系統を掛け合わせたスペルを唱えた。ルイズの肩から止めどなく流れていた血が、パキンという音と共に止まる。雪風の二つ名を持つタバサは、器用に傷口の表面を流れていた血を凍らせ、傷を塞いだのだった。だが、これはあくまで応急処置に過ぎない。取りあえず血を止めてい

るこの間に、少なくはない量の水の秘薬を使い、高度な治癒の魔法を幾重にも重ね掛けで、傷口から体の外に向かおうとする血の流れを変えなくてはならない。

「一先ず血は止まつたようだ。これから私は、彼女を医務室まで運びます。

ミス・タバサ、あなたも医務室まで着いてきて貰えますか？

一分一秒を争うこの事態です。出来ればあなたの風竜に乗せて頂きたい。

それからミス・モンモランシ、あなたもご同行願えますか？」

「へつ、私！」

コルベールに話し掛けられた、金髪の巻き毛が美しい少女は、驚いて声を上げた。  
「少しの間とはいえ、移動中にもヒーリングを掛けておきたいのです」

「は、はいっ！」

モンモランシーは、慌てた様子でルイズのそばまで近寄り、呪文を唱え始めた。

タバサは、呼び出した風竜の頭に手を置き、静かにコルベールへと領きを返した。

「大丈夫」

「ありがとうございます。さあ、急ぎましょー！」

コルベールはレビテーションの魔法を唱え、ルイズの身体をそつと宙に浮かせた。

彼女の身体が、風竜の背中へと近付いていく。そこへ、生徒たちのわあつという声が上がつた。

「何事ですか！」

「ミスター・コルベール、見てください！」

「何をですか、もつと具体的に言いなさい！」

「彼女の傷口です！」

コルベールは、宙に浮かせたルイズの身体を回転させ、丁度彼の視界からは隠れていった例の傷口を見た。何と彼女の肩の辺りに、白く眩ぐ光る何かが集まつて来ている。これは一体何なのだと、コルベールは驚愕しつつも頭を巡らした。そして彼は、つい先ほどまでよく似た光を見ていたことに気が付いた。

「これは、まさか召喚のゲート……!?」

彼は戸惑いを隠せなかつた。何分、こんなことは初めてのことである。爆発し、四散したと思っていたルイズの魔法が、実は僅かにも成功しており、こうして形を成したのであろうか？　何事も分からぬままに、光はルイズの肩口を覆い尽くして円盤状となると、ぐわんぐわんとうねり始めた。

「まさか、今更何かが召喚されるとでも言うのですか!?」

ゲートからは間もなく、ぬつと指先が飛び出て來た。

「ゴーレムかい……？」

その様子を見ていた土メイジの生徒の一人が、思わず呟いた。ゲートから飛び出した

手は、そして腕は、硬く冷たい鋼の光沢を放っていた。また彼は、その腕の造形にも目を見張るものがあることに気が付いた。ギーシュ・ド・グラモンは、トリスティエンが誇る軍閥貴族グラモン家の息子として、それなりに甲冑の類を見慣れている。しかしその彼をしても、ここまで精工に関節部を作りこんだガントレットは見たことがなく、あれならばきっと素手に近い滑らかな動きが出来るに違いないと、彼に思わせた。また鋼の腕の、洗練された無駄のないフォルムは、特別な装飾を持たないにも関わらず、美しくも力強いという印象を彼に与えた。

「ルイズ…… 君は一体、何を呼び出したと言うんだい？」

腕が肩口まで姿を現したところで、ゲートの光がぱあっと明るくなり、そして消えた。

コルベールが急ぎ彼女を地面に降ろして見てみると、呼び出された鋼の腕は、丁度彼女の失った腕にぴったりと嵌るように、くつ付いていた。

「なんと、これは……！」

「ルイズ！ 大丈夫！」

キユルケが声をかける後ろからは、幾人もの生徒が心配そうな眼差しをルイズに向けていた。

「ううん…… キユルケ？」

「あなた、その腕大丈夫なの？」

「!! ツツツ！ 痛ツ……！」

「やつぱり、まだ痛むのね。早く医務室に連れて行つてあげないと……！」

キュルケは、そこまで言つてからあるものを見とがめ、驚きに目を見開いた。

「ルイズ、あなたのその腕……」

「痛つ——!! なによ、キュルケ。早く医務室に連れて行きなさいよ——！」

キュルケは、ルイズの憎まれ口を気にすることなく言つた。

「動くの……？」

ルイズの失われた右腕、その喪失を埋めるかのように取りついた鋼の腕は、まるで彼女に元から付いていたかのように、その指先を動かしていた。

「うそつ！ ……痛ツツツ！！」

ルイズが右腕を意識して力んだ瞬間に、彼女は肩口から先へと尋常ならざる痛みを感じ、そのまま気を失つた。

……

セントラルのとある通りで、己に待ち受けている過酷な運命を思い、悲嘆に暮れていった少年は今……

「なんか元に戻つてるう～!!」

狂喜乱舞していた。公共の場にて耳を押さえたくなるほどの大声を上げて騒ぐなど、例えそれが未だ成長の余地ある身長を持つ少年の行いであつたとしても許し難い不作法であるが、もしこの場に彼の境遇を知る者がいれば、それも無理からぬことと理解を示したかもしれない。なんせ、『禁忌』に触れ、失われた体を取り戻すことこそが、かの若き鍊金術師の悲願であつたのだから……

「いや～、懐かしいなあ！　この腕の感覺!!　元氣してたかあ～？　俺の腕！」

なんか、長い間見ない内に、すっげえ細くなつたなー!!」

自分の手にすりすりと頬ずりする頭の可哀想な少年を、通行人は皆避けて通り過ぎていいく。

だが彼の親愛なる弟だけは、そんなエドワードを遠巻きに見るような真似はしなかつた。

「兄さん！」

「いやあ～、ほんと筋肉減つてんnaa。よつしや、リハビリもう一度頑張んぞ！」

「だから兄さんつてば！」

興奮状態にあつたエドワードは、度重なる弟の呼び掛けにようやく気が付くと、途端に沈んだような表情を浮かべた。

「あつ、アル…… わりい、そうだよな。まだ足も残つちやいるけど、俺だけが先に体を取り戻す

なんて複雑だよな。でも偶然取り戻したようなものだし、仕方がねえじやねえか。

大丈夫、俺が絶対お前の体も取り戻してやるからよ！」

「違うよ兄さん！ 僕はそんなこと言つてるんじやない！ それ、細すぎるよ！」

アルフォンスは、あり得ないという思いの滲んだ声と共に、エドワードの右腕を指差した。

「ああん？ 何だよアル、そりやあ確かに随分細くなつちまつたけど、

鍛え直せばこれぐらいすぐ戻んだろ」

「そうじやな———いつ！」

アルフォンスは、先ほどの狂喜していた兄に負けじと、大声を上げた。

「よく見て兄さん！ それ、女ものの腕だよ！」

「へつ？」

エドワードはぽけつとして、取り戻した自分の腕をよく見つめた。すぐに彼は、鍊金術の修行で培われたその眼で、腕の骨格が明らかに男性のものとしてはおかしいことに気が付いた。エドワードはしばらく沈黙した後……結局、叫んだ。

「ナ、ナンジャコリヤー———！」

「兄さんっ！」

今日もセントラルの街角に、鋼の兄弟の元気な叫び声が響き渡る。二人が騒いでいる  
その足元には、よく磨かれた木の棒が、誰に気付かれることもなく転がっていた。